

28KA-am10

チーム脳が生み出す創造的コミュニケーション教育－アクションラーニングによる問題解決プログラムの実施と効果－

○井手口 直子¹, 伊藤 由香里¹, 高木 彰子¹, 橋口 友貴¹, 末田 みさと¹, 府川 優子¹, 小野 真一¹(¹日本大薬)

【目的】6年制でのコミュニケーション技能態度教育は机上のみでは難しい。本学ではすでに模擬患者との個別面接の導入等、薬剤師としてのコミュニケーション教育で効果を上げているが、今回2年生に社会的スキルとしてのコミュニケーション、問題解決力、チームワークの向上を目的とした「アクションラーニング」という手法を取り入れると同時に、ラーニングコーチとして社会人ボランティアを多人数導入して交流する能力開発プログラムを行い、知見を得たので報告する。

【方法】対象学生 245 名をランダムに7名からなるグループ構成とし、質問力を高めるリスニング演習を1日行った後、学生から問題提起をさせてアクションラーニングを用いたグループでの問題解決演習を2日間行った。アクションラーニング実施時には、NPO法人日本アクションラーニング協会認定のコーチを中心に各グループに1名のボランティアによるラーニングコーチが付き、教えるのではなく学生の自主性と気付きの促進の目的で、時間と場面の管理を行った。各演習後と最終時にチーム力、質問力等の向上について振り返りアンケートを行った。

【結果】演習終了後75%の学生が自身の質問力の向上を感じ、84%が演習を通してチームワークの向上を感じた。また、93%がメンバーの問題を自分のことのように真剣に考え、87%が様々なメンバーに対して配慮を意識した。80%が自分のコミュニケーションのあり方に気付きを感じた。社会人のラーニングコーチの存在に対しては非常に肯定的な評価をし、コーチがコミュニケーションスタイルのロールモデルとなった側面が見えた。

【考察】コミュニケーションの要は「多様性受容」である。今回の演習内容は体験し、気付き、実践できる技能態度教育として有用であった。